

読者会員

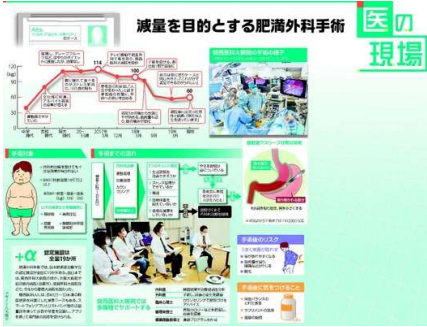
読売新聞

オンライン

登録情報

ニュース > 地域 > 関西発 > 企画・連載 > 医の現場

胃の一部切除 食欲減らす

2020/11/27 05:00 [読者会員限定]

体重の減少を目的に、胃の一部を切って小さくする「肥満外科手術」。2014年に一部の手術が保険適用となり、実施件数が増えている。日本肥満症治療学会によると、11年以降、年間150～200件程度だったが、17年は約400件、19年は約530件に上る。

肥満解消は食事の改善や運動療法などが基本だ。手術はあくまで「治療の最終手段」で、慎重な判断が必要となる。BMI（体格指数）が35以上の高度肥満で、糖尿病や高血圧症などを合併し、半年以上の内科的治療で十分な効果がない人が対象だ。

ふくくう

学会の認定施設である関西医科大学病院（大阪府枚方市）は、保険が適用される「腹腔鏡下スリーブ状胃切除術」を年間15件程度実施している。大阪府内の福祉職員女性Aさん（37）は18年3月、この手術を受けた。

Aさんは、10代後半からストレス解消で親に隠れて外食を繰り返し、身長は1メートル51と小柄だが、20歳の頃に体重が100キロを超えた。様々なダイエットも効果がなく、一時は114キロ、BMI50程度に。テレビ番組で肥満外科手術を知り、「これでやせられるなら」と決意した。

手術は腹部に6か所の小さな穴を開け、カメラと器具を入れて胃の約8割を切除し、バナナ1本程度（約100ミリ・リットル）を残す。食欲を刺激するホルモンを分泌する場所を取り除き、食欲を低下させる効果もある。

Aさんは手術直後、食事が極端に減り、卵豆腐1個で満腹になった。「驚いたけど、これだけで満足できることがうれしかった」と言う。生活習慣を改善しないとリバウンドするが、今も60キロ前後を維持している。

井上健太郎准教授は「やせる習慣が身につかなければ、手術はしない。決して楽にやせる手段ではないことを十分に認識してほしい」と強調する。

◇記者から

「食べられないことが幸せ」。Aさんの表情は、とても晴れやかだった。

だが、肥満外科手術を受ければ、誰もが肥満を解消できるわけではない。胃は伸び縮みするため、普通に食べ続ければ、6～9か月で元の量を食べられるようになり、リバウンドして再び手術を受ける人もいる。手術は、生活習慣を変える「きっかけ」に過ぎない。術後こそ、本人の根気が試される。

Aさんは手術を機に転職。周囲にかつての姿を知る人は両親と一部の知人のみで、第二の人生を歩んでいる。手術を受ける覚悟は、それほど大きいものだと知ってほしい。（村上和史）

無断転載・複製を禁じます

この記事をストックする

使い方

地域